



アウシュヴィッツは、第2次世界大戦時ナチス・ドイツ最大級の強制収容所です。百数十万の尊い命が奪われたこの収容所跡は、広島の実験ドーム同様、人類の負の遺産として、ユネスコ世界遺産に登録されています。アウシュヴィッツ平和博物館は、同収容所跡を保存するポーランド国立博物館から借り受けた犠牲者の遺品・関連資料・記録写真等を展示しています。



ワルシャワ ポーランド・ユダヤ史博物館と
ワルシャワ・ゲットー蜂起記念碑

撮影 加藤有子

ホロコーストの真実を伝える

- 新年のご挨拶 藤田龍文 ————— 2
- 催し・企画展案内 ————— 2
- 連載 世界の冠たる非暴力憲法九条 ————— 3
- 新年のご挨拶 小淵真理 ————— 4
- 会員だより「地べたから」 ————— 4
- 連載 ポーランドにおけるホロコーストの記憶 ④ ————— 6
- Tea Room ————— 8

おしらせ

Auschwitz Peace Museum

2019年国際ホロコーストデー催し

映画上映会「否定と肯定」

1月26日(土) 13:30～

白河市立図書館地域交流会議室

監督 ミック・ジャクソン

2016年制作

イギリス・アメリカ合衆国合作歴史映画

初春のお慶びを謹んで申しあげます。

旧年中は当認定NPO法人の活動にひとかたならぬご理解とご協力を賜りまして心より御礼申し上げます。昨年度は、多くの皆さまに支えられ開館15周年を迎えることができました。アウシュヴィッツ平和博物館開館15周年記念事業として白河市文化交流館コミネス大ホールにて新作能「鎮魂」アウシュヴィッツ・フクシマの能を盛大に上演することができ、会員の皆さまや多くの市民の皆さま、多くの能ファンの方々にも、ご覧いただくことができました。

新作能「鎮魂」アウシュヴィッツ・フクシマ

作 ・・・ヤドヴィカ・ロドヴィッチ（元駐日ポーランド共和国大使）

演出・・・笠井賢一

日時・・・2018年5月20日（日）

場 所・・・白河市文化交流館コミネス大ホール 来客数 約700名弱

新作能「鎮魂」アウシュヴィッツ・フクシマの能はアウシュヴィッツ等で行われたホロコーストと東日本大震災時の福島原発災害を重ね合わせて、それぞれの犠牲者を悼み、残された人を励まし、心の復興に寄与できるよう願ったとともに、昨年はポーランド独立100年の年であり、両国の友好と交流にも役立つこととし開催いたしました。さらに本年は日・ポーランド樹立100年の年でもありますので、本年も関連する行事が多くあるかと思えます。

本年度は1月に国際ホロコーストデーとして、2019年1月26日（土）13時30分より白河市立図書館地域交流館にてユダヤ人歴史学者とホロコースト否定論者の前代未聞の対決を映画化した映画「否定と肯定」を入場無料にて開催いたします。16年目を迎えあらためてアウシュヴィッツ平和博物館の存在意義を考え直し、多くの会員の皆さまに平和博物館活動をご理解いただけるよう努力していきたいと思っております。

皆様のご協力ご支援に感謝申し上げます、本年も皆様と手を携え活動することをお約束し新年のご挨拶とさせていただきます。

平成31年 元旦

副理事長 藤田龍文

国際ホロコースト・メモリアルデー映画上映会

「否定と肯定」

監督：ミック・ジャクソン 2016年制作 イギリス・アメリカ合衆国合作

1月26日（土）13:30～白河市立図書館地域交流会議室

参加費 無料（先着100人）

第二次世界大戦下のヨーロッパでは、特定の少数派集団を標的とする大虐殺（ジェノサイド）により、ユダヤ人だけで約600万人が殺害されました。独裁者ヒトラーの人種差別が伝統的な反ユダヤ感情、優勢思想と結びつき大虐殺が行われました。なかでもガス室と高速焼却炉を備えたアウシュヴィッツ強制収容所では、1945年1月27日にソ連軍が解放するまでに、少なくとも推定100万人の命が奪われました。2005年、国連総会はこのことを確認し、人種差別・偏見・民族憎悪の危険性に警告を発すべく、この日を国際ホロコースト・メモリアルデーと定めました。ヨーロッパ諸国では追悼の式典や行事が行われています。当館でも、この呼びかけに応じ毎年催しをしてきました。今年は映画上映を開催します。是非、ご覧ください。

「否定と肯定」～ユダヤ人歴史学者とホロコースト否定論者の前代未聞の対決を映画化！

ホロコーストという最大にして最悪の世界史を題材とした本作は、歴史の真実を伝えていかなくてはならない我々一人ひとりに対する警告でもある。（チラシより抜粋）



催し

information

「沖縄戦とひめゆり学徒展」1月28日まで開催中

企画展

information

連載

4

世界の冠たる非暴力憲法九条

国家としての暴力装置である陸・海・空の三軍の放棄を宣言している日本国憲法は「世界の宝」である。現実がそれを踏みにじってしまっているのに、

文字だけの価値のないものだという人たちが断じてそうではない。なすべきことがある。それは、先ず大切な宝を踏みにじる足をどける作業に非暴力直接行動で取り組むことです。価値ある宝を無にする試みは朝鮮戦争

時代から始まって今日に至るまで続けられアベ政権によって完成させようとしているのです。

最も重く、強大な九条を踏み潰す力は「日米地位協定」です。これは、日本の米国への隷属化を強化固定しようとする「不平等協定」です。これの改定・撤廃こそが「世界の宝」を救い、生かすために緊急に取り組むべき課題なのです。勿論アベ政権による多数を頼み、数の暴力による強行採決での「憲法改悪」は阻止せねばならぬことです。かつて、不平等条約に生命賭けで挑み、成し遂げた外交の天才「陸奥宗光」の事蹟を学ぶときです。（半藤一利著「語り継ぐ この国のかたち」大和書房―参照）

ソ連崩壊に至る背後に「非暴力」による「非協力」があり、東欧の人々が命を懸けて非暴力活動に取り組み、ゆつくりだが着実にソ連の影響を少しずつ削っていった事実を無視することはできない。東欧革命は非暴力主義が手にした史上最高の劇的な勝利の一つである。（マーク・カーランスキー「非

櫻井淳司



櫻井淳司（さくらいじゅんじ）
一九四〇年神戸生まれ東京育ち。東京神学大学修士修了、キリスト教団フリー牧師、非暴力トレーニングトレーナー、ワークショップファシリテーター

暴力」―武器を持たない闘士たち―ラ
ンダムハウス・講談社 クロノス選書
P261以下参照）

「非暴力」は決して「非力」でも「無力」でもない。限らない豊かさを秘める無限に「有力」なものである。その具体的力を以下に列挙してみましよう。説得力、和解力、握手力、隣人愛、言葉力、想像力、太っ腹力、客観力、寛容力、耐久力、持続力、創造力、対

話力、質問力、笑顔力、感謝力、分かち合い力、親切力、共感力、寄り添い力、援助力、達観力、柔軟力、ユーモア力、理解力、直観力、演技力、実行力、敗北力、共存力、大胆力、孤立方、洞察力、配慮力、説明力、バランス力、決断力、集中力、丸腰力、同調力、傾聴力、誠実力、積極力、援助力、息抜き等々

最後に、沖縄での非暴力活動の成功例を紹介します。

「作業員達への真心を尽くした呼びかけ、加えて一歩も譲らないしどとさ。海底に投げ込まれた建築機材に潜ってしがみつき抵抗、それが連日の一年間、

作業員達の人間性がゆさぶられた。もはや、暴力的な強硬突破は彼らにはできなかつた。予定されていた六十三箇所のボーリングは一箇所も出来ないまま大型台風十四号の直撃の予報が追い風になる。一年近く海中に建っていた鉄パイプの足場は完全に撤去され、彼らは撤退することになった。」

「あなたたちを人殺しの手伝いをさせたくないのです。」

（平良修牧師「二〇〇四年辺野古で基地建設阻止行動における呼びかけ」）

連載終了

櫻井淳司さんは十一月に梯子から落ちて腰を骨折。ベッドが三十度しか上げられない状態で原稿を書いてくださいました。学生の時に柔道をしていて受け身の術が体に染みついている。さらに骨密度が高いとのことで大事に至らなかつたようです。この通信が届くころには、リハビリを終えて元気になられていることでしょう。ありがとうございました。

新年のご挨拶

館長 小淵 真理

東日本大震災と福島原発事故から8年が経ちました。昨年は列島のあちこちで災害が起き、被災された方々がどのように年を越されたのか気になるところです。「復興」という言葉が独り歩きをしているように見えます。

昨年は15周年で新作能「鎮魂」を上演し大成功を収めました。これも全国の会員の皆さまや地域の関係者の方々のご支援によるものと改めて感謝申し上げます。会場の白河文化交流館コミネスの能舞台で初めての上演でし

た。終了後に関係者の間でよい評価をいただいたと聞きました。

今年は、日ポ国交樹立100周年です。駐日ポーランド大使館でもポーランド芸術祭2019として様々な催しがあるようです。私も都合をつけて参加したいと思っています。

また、アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館との連携も積極的に交流を進めたいと思います。

長期になった安倍政権は民意を無視し、次々に法律を閣議決定しています。全国で明治維新150周年のムードを作り明治を美化

しているかのように見えました。日本がこの時代に軍備を強化し侵略の道の準備を進めていたことは明らかです。福島県のいくつかの市では戊辰戦争150周年で盛り上がり、この差異に呆然としました。

私たちは、次の世代に誰もが生きやすい社会を手渡すために、老若男女でネットワークし、それぞれの地域で声を上げ続けていきたいと思います。みなさまの健康が守られ、この一年が実りあることを願って新年のご挨拶といたします。

会員だより

地べたから

小山 由記

(神奈川県在住)

十月の中旬に、ポーランドに行った。ワルシャワ二泊、クラクフ二泊で、四泊七日という強行軍。アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所を訪ねるツアーだった。が、当地にいたのは、ほんの数時間。震災や空襲で多くの人が亡くなって百年も経たないのに、東京の街を歩いていても、畏怖のようなものを感じないのは、当時の地層との間に分厚い層があるからか。アウシュヴィッツは、むき出しの地面や石ころが、足の裏にじかに伝わってくる。

第一収容所には多くの収容棟が展示室

として公開され、何を展示しているのか説明を受けずとも分かるほど、緊張に急ぎ立てられるようにして経巡った。第二収容所は途方もなく広くて、ほんの何棟か中に入った以外は、建物と建物、廃墟と廃墟のあいだを、ひたすら歩いた。

黄金の秋と呼ばれる季節で、旅の間中、快晴が続く。夜も霧も想像できない、開けつひろげな空間が広がっていた。世界中から訪問者が訪れ、渡航前に想像していた、戦慄や寂寥感や圧迫感は覚えなかったが、もし、話しかける相手もなく、足を止める隙もないほど影や湿気に覆われていたら、たとえ十分でも一人でいられたろうか。高校生ぐらいのグループが何組もいて、ダビデの星を羽織って、死の門か

ら続く引き込み線の上を思い思いに歩いたり、教師と思しき人を囲んで、地べたに車座になって話し込んだりしていた。

「ARBEIT MACHT FREI (直訳…労働は自由を作る)」と鑄造された文字を頭上に飾った門も、(早い時期に精神を病んだナチの副総統ではなく)収容所長だったヘスの処刑場も、狂気のとばつちりで収容者が銃殺された死の壁も、静まり返っていた。半壊したまま完全に朽ちもせずにあつたガス室も、磨き上げられたかのような焼却炉も、蚕棚のように作りつけられた三段ベッドも、穴を開けた板を渡しただけのトイレも、何のおいもしなかった。眼鏡、旅行鞆、携帯食器、チクロンBの缶などが山と積まれている展示室の一つに、髪の毛の山もあったが、以

前写真で見たように天井の高さまで積み上がっていない。七十年の間に湿り気を含んで沈んだのだろうか。

ワルシャワは、ナチの侵略によってほぼ壊滅したが、旧市街地を細部まで復元して、世界遺産となっている。戦前の街並みや建物を元に戻す工事はまだ続いている、中世の城も再建中だった。戦後建てられた、スターリンの贈り物と言われる文化科学宮殿も街を睥睨していたが、それを囲むようにして、高層ビルが新築されている最中でもあった。

ワルシャワでは、足が棒になるほど歩いた。ワルシャワ・ゲットー蜂起記念碑(1948年完成・70年西独首相訪問)、ワルシャワ蜂起記念碑(1989年)、ゲットー境界線と壁、「集荷場(収容所へ移

送するための鉄道の跡地」追悼記念碑（1988年）、ワルシャワ蜂起博物館（2004年）、ポーランド・ユダヤ人歴史博物館（2013年）。ワルシャワに戻る直前、クラクフ国立美術館で、ダ・ヴィンチの『白貂を抱く貴婦人』（2016年ポーランド政府購入）を見た。

ナチの司令部が置かれたことで戦火を免れたクラクフは、緩やかな坂が多く、緑豊かで、何世紀にもおよぶ建築様式で増築されたヴァヴェル城も旧市街も歴史を刻んでいたが、ワルシャワからの列車で着いたクラクフ中央駅は、ここは表参道かと思ふ、無駄のない大きな箱のような、三階建てのガラス張りの建物で、ブランドショップ、チェーン店、大型スーパー、家電量販店などが犇いていた。マグドナルドやケンタッキーフライドチキンの店舗もよく見かけた。

帰ってから一ヶ月後、名古屋で、「ホロコーストと原爆の記憶」をテーマにして、ポーランド人学者を招いた国際シンポジウム（JSPS 科研費 代表 加藤有子さん主催）があると知り、難しそうだが、何しろ行ってきたばかりだしとこじつけて、聴講しに行った。

ホロコーストや原爆などを実際に知る人が少なくなる一方で、その体験に触れることのできる施設やメディアが増えてき

た。記憶はあくまでも個人的なもので、世間一般にひとしなみに共有できるものではない。だからと言って、その体験を、記憶を、風化させてはならない。大きくジェノサイドと括られるものは、その事後から生き証人の数が限られている。語られようのない記憶をどのようにして発掘し、後世に伝えていくか。記憶を語り継がれる側にいる私たちの多くは、最初から、被害者、加害者、傍観者という立場からは離れたところにいる。

イスラエルのヤド・ヴァシェム（ホロコースト記念館）には、「諸国民の中の正義の人」として六千人の非ユダヤ系ポーランド人が顕彰されている。戦時中、孤独や白眼視と闘いながら、ユダヤ人に助力を惜しまなかった人々が、近年になって、当時のポーランド人の代表だったかのように脚光を浴びている。日本では、昭和天皇の戦争責任については、タブー視されてきた。与党内にはいまだに南京事件を否定しようとする勢力もある。時の為政者の意向次第で、排除されたり、捻じ曲げられたり、ことさらに美化されたりする記憶に振り回されずに、真の記憶を見極めるにはどうしたらいいのだろうか。

名古屋でのシンポジウムの前後二回、ゲノム編集技術検討会の公開勉強会というのがある。これまた難しそうだった

が、出てみた。高校生の時に習った生物が、こんな歳になって、こんなところで役に立つとは、と思われるほど、この技術が当面の目標として掲げている、人工生物を作る仕組みが理解できた。ヒトゲノムにある三十億のDNA塩基対の解析は既に終了し、次は、それをバラバラに分解して、一つずつ合成し、それらを繋ぎ合わせれば、参照元の生命体と同じではないが、何かが生まれるのではないかというものだ。科学者の興奮が分かるような気がした。マンハッタン計画が加速したときと相通じるものがあるだろう。敵や競争相手に先を越される前に研究を進めなくては、という理屈も似ている。

三十年ほど前、政府主導で、第五世代コンピュータという開発目標が掲げられ、人間のように言語を習得する人工知能が期待された。いま、何度目かの人工知能ブームとなり、将棋AIが名人に勝ち、ついにアトムが誕生したかと錯覚させられるが、計算がさらに高速になり、扱えるデータ量が格段に増えて、コンピュータの性能が一段と高まったとしても、その将棋AIは、ふと「今日の夕飯どうしようか」とは考えない。今後、AIはどんどん専門分化していくだろうが、どんなタカ人間であっても、AIは単純ではない。AIは、限りなく人間から遠いものとなるだろう。

辺野古の埋め立てが始まり、宮城県が、いの一歩に改正法の水道民営化に手を挙げ、モニタリングポストが福島から撤去されようとしている。ポーランドでは、「法と正義」という政党が先日の選挙で圧倒的な勝利を収め、今年、「ポーランド国民及び国家に対する虚偽・誤った誹議を防止すること」を目的とした国家記憶院改正法案が施行され、国内外で物議を醸している。日本は、ラグビーW杯、東京五輪、大阪万博に向けて一億総動員の勢いだ。ずっとお祭りをしていれば、本質を見なくてすむ、核心を突かれなくてすむ、余計なことを考えずにすむ。

個人的な話になるが、かれこれ三十年、IT業界にいる。当初は、アイテ、なんて言っていた。人工知能がずっと最先端であるかのようなところについて、もやもやしていたものが、この数ヶ月の間に見聞きしたことで相俟って、やっと分かった。寿命というものがあつたのだとしたら、天寿を全うできなかった数多くの人々の分まで、次から次へと生きながらえて、己の嫉妬や意地や偏狭さを受け入れながら、好奇心のアンテナをひとつひとつ張り、少しずつ想像力を働かせ、地べたでぐずぐず考えるという、人間ならではのことを当たり前になり続けられ、あとはどうでもいい、と。

ポーランドにおけるホロコーストの記憶

ワルシャワ・ゲット、学術界の現在

加藤有子



加藤有子（かとうありこ）名古屋外国語大学准教授。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。博士（学術）。ポーランド文学、表象文化論。著書に『ブルーノ・シュルツ―目から手へ』、訳書に『ソフィア・ナウコフスカ「メダリオン」』など。

二〇一八年二月に改正されたポーランドの国民記憶法は、ナチス犯罪の責任もしくは共同責任をポーランドやポーランド国民にさせることを罰金もしくは三年以下の自由刑にすることを定め、国内外で物議を醸した。ポーランド人のみならず、場所はどこであれ外国人も対象とするこの法に、学術界からはもちろん、イスラエルやアメリカからも批判の声があがり、外交面の影響が表面化し始めた二〇一八年六月、議会でこれらの項目の削除が決議された。二〇〇〇年、ヤン・T・グロスの著書『隣人たち』によって、一九四一年にポーランドの町イェドヴァブネで起きたユダヤ人虐殺がドイツ兵によつてではなく、ポーランド人の隣人たちによつて行われたことが明らかにされた。これ以降、ポーランド人のユダヤ人虐殺への関与や協力、反ユダヤ主義はポーランドにおけるホロコースト研究の重要なテーマのひとつになっている。改正条項には「学問や芸術は不問」という文言があったとはいえ、数か月にわたつてこの法律がポーランドというEU加盟国において効力を持った意味は大きい。

一方、二〇一八年はポーランド人のユダヤ人虐殺への関与や反ユダヤ主義をめぐり、広範な資料調査に基づく大著が

ポーランドの研究者によつて相次いで刊行された年だった。十一月、その著者を四名、さらに日本の戦争の記憶に関わる日本人研究者を四名招いて、名古屋で国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶―ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」が開かれた。

文学研究者のヤツェク・レオチャクは、ユダヤ人虐殺や反ユダヤ主義とポーランドのカトリック教会、カトリック・ナシヨナリズムとの結びつきを論じた。社会学者のバルバラ・エンゲルキング（アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館の諮問機関である国際オシフェンチム委員会の現委員長）は、一九四二―四三年のユダヤ人虐殺の「第三段階」（絶滅収容所への移送から逃れたユダヤ人が地方の村や森に隠れた局面）を扱った。ゲットーから逃れてユダヤ人が隠れた地方の町村を例に、救援を求めるユダヤ人に対してポーランド人が取った態度を、資料調査をもとに七つに類型化した（無償の救援、有償の救援、救援の拒絶、無関心、ゆすり、密告、殺害）。文化人類学者のヨアンナ・トカリスカールバキルは、ユダヤ人虐殺の「第四段階」、すなわち、終戦直後の反ユダヤ主義を扱った。一九四六年七月四日

にキエルツェで起きたポーランド住民によるユダヤ人住民の集団殺戮を、新資料をもとに複数の視点から明らかにした。そこでは、中世以来ヨーロッパに広まったユダヤ人の儀式殺人伝説（ユダヤ人が宗教儀式に必要な血を得るためにキリスト教徒の子供を誘拐して殺害するという伝説）の変形が背景にあることも示された。政治学者のピョートル・フォレツキは、ユダヤ人とポーランド人の関係をめぐるポーランド社会の言説が、国内を二分する論争に展開していることを、ユダヤ人を救った「正義の人」の政治利用を軸に報告する。膨大な資料を発掘、調査し、それらをテキスト分析、心理学、社会学、文化人類学、政治学という歴史学とは異なるアプローチから分析する研究であり、聴衆も交えた活発な議論が続いた。

戦争犯罪や戦時暴力をめぐる国内の語りの分裂、「正義の人」の前景化、その背景にあるナシヨナリズムと結びついた歴史否定論や歴史修正主義の浸透など、戦中、戦後史も地政学も異なる日本とポーランドに、記憶をめぐる共通性が浮かび上がった。

日本では、ヤン・T・グロスの『恐怖』（二〇〇六、邦訳『アウシュヴィッツ後

の反ユダヤ主義』（二〇〇八）によつて、ポーランドの反ユダヤ主義とカトリック教会の結びつき、キエルツェのボグロムなど、今回の報告に関わる大枠の紹介はなされていたものの、それ以降の研究の紹介はなかった。ポーランド語の新刊のエッセンスを集めた四本の論考は今後、日本の研究者四名の論考と合わせて刊行予定である。ポーランドの事例との比較を通して、日本の現状も逆照射されよう。

ポーランドにおけるホロコーストの記憶は、隣人ユダヤ人に対してポーランド人がいかにふるまったか、という倫理的次元の問いに関わる。ナチス・ドイツは占領下のポーランドで、ポーランド人とユダヤ系市民を徹底的に差別化し、分断していく。ユダヤ人はゲットーに追いやりられ、ゲットーの外でユダヤ人を匿う者は死刑となり、密告すれば褒賞があった。しかし、何より多かったのは救援もせず、加担もしなかった傍観者とされる。戦後のポーランド文学や映画は、この問題をポーランド人の無関心に焦点化して取り上げた。

ユダヤ系市民に対するポーランド人の無関心の象徴として、ポーランドにおいて機能するのが、市街地の真ん中に作ら

れたワルシャワ・ゲットを囲う壁に隣接するクラシンスキ広場に置かれた回転遊具だ。一九四三年四月十九日に始まるワルシャワ・ゲット解体作戦とそれに抗するゲット内のユダヤ系住民による対ドイツ武装蜂起、すなわちワルシャワ・ゲット蜂起は、SS将校ユルゲン・シュトロップ指揮下のドイツ部隊によって鎮圧される五月十六日まで、およそ一か月にわたって続いた。武力に圧倒的に劣るユダヤ人の予想外のゲリラ的抵抗に、ドイツ側は建物を一棟一棟燃やして、なかにいる人間を外に追い出す作戦に出た。ゲットには炎と煙が立ち込め、銃撃音が響き渡り、三メートルの壁に遮られていても、その光景と音はワルシャワ市内にいれば見え、聞こえ、匂いとなって市民の生活に入り込んだ。そのなかで、機械式の回転遊具はポーランド市民を乗せて稼働し続けた。

ワルシャワにいた詩人のチェスワフ・ミウオシユ（一九八〇年ノーベル文学賞）は、ゲット蜂起の最中に巡ってきた復活祭の日曜、郊外に住む作家のイエジ・アンジェイエフスキを訪ねるために乗った路面電車で、この回転遊具に興ずる人びとを目撃した。「春の晴れた夕べ／はずむような音楽が流れるかたわら／ゲットの壁の向こうにとどろく一斉射撃は／つない空に向かって／男女のペアが舞い上がった」「火事場に起こる竜巻が／少女らのスカートをまきあげ／美しいワルシャワの日曜日／陽気な群衆は笑って

いた」（西成彦訳「カンポ・デイ・フィオリ」『チェスワフ・ミウオシユ詩集』）。ミウオシユが訪ねたアンジェイエフスキは短編「聖週間」（吉上昭三訳あり）のなかで、ゲット蜂起に対するポーランド人の反応を前述の研究者エンゲルキングさながらに類型化して描いた。この短編をアンジェイ・ワイダが同じタイトルで映画化している。映画では、回転遊具に興じる市民のシーンが挿入される一方、宙に高く舞う回転遊具はゲット蜂起の加勢に向かおうと企図するポーランド人たちのゲット内部の偵察にも使われ、無関心の象徴が反転される。無関心のポーランド人という欧米におけるステレオタイプに対し、さまざまな対応があつたことを示そうとするワイダの意図が見える。

ポーランドにおいてゲット蜂起のもう一つの象徴的イメージとなるのが、ゲットの燃える建物から飛び降りるユダヤ人の姿だ。ゾフィア・ナウコフスカは短編「墓場の女」（拙訳『メダリオン』所収）のなかで、炎とドイツ兵から逃れるために、子供を毛布にくるんで先に窓から投げ、あるいは子供と一緒に飛び降りる人の姿を書き留める。その出来事は視覚的光景にとどまらない。「ぴしゃん、ぴしゃん」という舗装道路に衝突した人体の立てる音が、壁の外にまで届いた。ゲット解体作戦の指揮官シュトロップは、作戦の様子を日付とともに記録している（なお、戦後、収監されたシュトロップが同様に語っている様子をカジ



ミエシユ・モチャルスキが『死刑執行人との対話』（小原雅俊訳）に記録している）。この通称「シュトロップ・レポート」は、撮影班による写真も多数含む。ホロコーストの象徴的イメージとして世界的に知られる、両手を挙げた少年の写真もその一つだ。このほか、ポーランドで比較的知られるのが、飛び降りて宙に浮く男性のイメージである（写真）。

戦後を代表するポーランド文学者のヤン・ブウォンスキは、一九八七年に発表されたエッセイ「哀れなポーランド人がゲットを見つめる」のなかで、ユダヤ人虐殺に対する傍観者としてのポーランド人の責任の問題を取り上げた。前掲の詩「カンポ・デイ・フィオリ」を、後年のミウオシユが一義的と感じていたこと、そして死を観察者の立場から描いた

ゆえに「非道德的」とも考えていたことを紹介し、ゲット蜂起に際してミウオシユが同時期に書いた詩「哀れなキリスト教徒がゲットを見つめる」（西訳、前掲詩集）にこそ、ミウオシユひいてはポーランド人の罪の意識をめぐる葛藤が現れていると評価する。そして、自分たちの過去や倫理的責任を真実に照らして見つめる義務がある、と結ぶ。死と生の「宙づり」状態で、私たちの注意を緊張のうちに引き留める飛び降りる男のイメージは、その目撃者となったポーランド人の良心を問う象徴的イメージとして機能し、ブウォンスキの問いに重なる。

「写真は彼らを生きたまま止めた／そして、いまはとどめる／地面の上で、地面に向かって。」「この人たちにわたしができるのは二つだけ——この飛行を書きとめ／最後の文を書き加えないこと」。

一九二三年生まれのヴィスワヴァ・シンボルスカ（一九九六年ノーベル文学賞）が、二〇〇一年のニューヨークの事件を受けて書いた詩「九月十一日の写真」（二〇〇二）は、間違いなく、高層ビルから飛び降りる人にゲットで飛び降りる人のイメージを重ねている。詩人は最後の文を書き加えないことで死にゆく者への良心を示す。しかし、学術界がなさねばならないのは、イメージを直視し、史実に照らした最後の言葉を書きつけること以外にない。

「白河の秋」 伊藤美恵子さん



旅が好きだ。自然の美しさより、歴史や人々の暮らしを感じ
る旅の方が好きだ。白河へは、東日本大震災後「水俣白河展」
が開かれる、というので訪れたのだった。

驚いた。水俣と福島が、時を隔て場所を隔てているにもか
かわらず、その構造が余りに似ていたから。人々に豊かさ
をもたらすと喧伝されたものが崩れ、なのにそれを仕切り直す
どころか、被害者ばかりが苦しみ、沈黙に押し込められてい
く過程。一体私たちは何を見て何をして来たのか、という暗
澹たる気持ちと、この福島で「水俣展」が行われたという力
強い意志への信頼感を抱えながら、アウシュヴィッツ平和博

物館を訪れた。

展示されているものはむごい苦しいものなのに、何故か救わ
れるような気持ちにもなる。どうしてだ。置かれていた貨車
を見て、映画「コルチャック先生」のラストシーン、子どもたちが
貨車から飛び降りていき、その先は絶望しかなかったはずなの
に、彼らが、この白河の自然の中に飛び出ていくように感じて
しまった。

また来ようね、と話していた連れ合いが、2年前に3か月半
の闘病の末逝ってしまった。共に見た白河の秋は、忘れられな
い秋の一つだ。
(神奈川県会の会員)

寄付者一覧

(順不同、敬称略 2018年9月1日～11月30日)

寄付金をありがとうございました。

佐藤明子 荒祐 小沼富男 石川桂子 田村幸康 清野詢子 小野田俊男 細井直子 渡辺園子 松本光子 平山秀夫 伊藤美恵子
今井慶子 杉下ゆき子 新妻邦彦 渡辺保志 高橋富子 小淵真理 谷口弘子 丸山浩 永井正取 間部かほる
日本基督教団須賀川教会

サポーターのご案内

アウシュヴィッツ平和博物館では、当館の運営を会費によって支
撑くださるサポーター(賛助会員)を募集しています。

特定の団体や企業に頼らずボランティアが非営利で運営している
当博物館は、会員の支援・協力により維持されています。

「いのち」の尊さを学び伝える当館の活動に、ぜひ賛助会員として、
ご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

サポーター(賛助会員)要項

【年会費】

個人 1口 3,000円 団体 1口 3,000円 (口数に制限はありません)

【特典】

- サポーターカード(会員証)
- 「imagine」の1年間無料送付
- 当館関連イベントへの優先参加
- ※入会は随時受付しております。

会員数

(2018年11月末現在)

●正会員 合計110人

青森(1) 岩手(1) 宮城(4) 山形(1) 福島(38) 栃木(13) 群馬(2)
埼玉(2) 千葉(2) 東京(14) 神奈川(9) 新潟(10) 福井(1)
長野(4) 静岡(1) 三重(2) 京都(1) 大阪(2) 山口(1) 福岡(1)

●賛助会員(サポーター)個人 合計522人

北海道(7) 青森(10) 岩手(6) 宮城(22) 秋田(1) 山形(4) 福島(148)
茨城(10) 栃木(26) 群馬(8) 埼玉(31) 千葉(22) 東京(78) 神奈川(29)
新潟(45) 福井(1) 山梨(1) 長野(13) 静岡(9) 愛知(2) 三重(1)
滋賀(2) 京都(9) 大阪(11) 兵庫(4) 奈良(1) 鳥取(4) 山口(2)
愛媛(1) 福岡(7) 佐賀(1) 長崎(2) 大分(1) 宮崎(1) 沖縄(2)

●賛助会員(サポーター)団体 合計31団体

宮城(1) 山形(1) 福島(11) 栃木(3) 群馬(1) 埼玉(2) 千葉(1) 東京(10)
新潟(1)

編集後記

平成最後の年の始まりです。この国はどこ
へ向かおうとしているのか、憲法を変えて戦
争をする国へ歩くのでしょうか、科学技術の
急速な進歩に人類は付いていけるのしょう
か? 倫理観のない社会は、いつか滅亡する予
感がするの私だけでしょうか?
通信の送付が遅れましたことお詫びいた
します。2月は冬期休館です。
(小淵真理)

いのちの尊さを心に刻む「市民の手づくりミュージアム」

アウシュヴィッツ平和博物館

【発行所】

認定NPO法人アウシュヴィッツ平和博物館
〒961-0835 福島県白河市白坂三輪台245
TEL 0248-28-2108 / FAX 0248-21-9068
<http://www.am-j.or.jp/>
e-mail: muzeumau@maple.ocn.ne.jp

【企画編集】

認定NPO法人アウシュヴィッツ平和博物館
「imagine」編集委員会(編集部)

発行人 小淵真理

制作 (株) SAGA DESIGN SEEDS

Auschwitz Peace Museum Japan
Newsletter
imagine vol.61
2019.1.1